反現象学の道

――フランツ・ブレンターノにおける非超越論的現象学と個体主義的存在論に基づく直接実在論的認識論について――

次田　憲和

一　本論のあらまし

フランツ・ブレンターノ（一八三八‐一九一七）の経験的心理学（記述的心理学）とは超越論的ではなくとも一種の現象学と呼べるものであるが、本小論では、ブレンターノのこうした現象学的な心理学がそれと相容れないように思われる実在論――「物主義 Reismus」とも名づけられる――へといかなる変転を遂げたかについて、取り上げられることの少ない晩年の口述論文などをもとに、その理論的な特徴と課題について論じ、同時に、フッサール現象学が心理学ではなく「超越論的」哲学たろうとしたことの意義について考察することにする。(一)

二　現象学的立場から実在論的‐存在論的立場へ

ブレンターノは、主著『経験的立場による心理学』（第一巻）において、「志向性」を――物理現象にはない――「心理現象（＝作用）」の徴表と見なし、志向性という特質を担

う心理現象の本来の姿は、内的知覚のみによって明証的なものとして直接に捉えられるものと考えた。[一] こうした方法論的特質を有する心理学は一種の現象学でもあるが、他方、外的に知覚される「物理現象」を学の対象とする物理的自然科学は、こうした現象学的な心理学とは方法上異なるものである。志向性 ――物理現象という「内容」を有し客観へと関係してゆく―― という特質をもつ心理現象の諸類型（表象判断心情）の記述を行う心理学こそが哲学の基礎部をなすのであって、これを土台として美学・論理学・倫理学などの他部門の学が成立するとされる。[二] だが ――ブレンターノ心理学は（不完全ながら）現象学的な学と言えるとしても―― 志向的客観としての物理現象を超えた物理的世界自体を完全に遮断していないため、純粋かつ超越論的な観念論ではなく、実在論的視点を背後に残した「非超越論的」現象学なのである。

しかしながら、ブレンターノはその後の哲学の歩みにおいて ――超越論的現象学という観念論の一種に通じる――「志向性」理論を突き詰めることなく、ある種の「実在論」に傾斜していった。彼の志向性理論を継承したフッサールが、それを他のあらゆる自然的学から純化した上で、その純粋志向性理論の内実を極限までに肥大化させて超越論的現象学を作り上げていた頃、奇しくも師ブレンターノはこうした「現象学の道」を逆方向に歩んでいたのだった。これは、疑似現象学としての記述的心理学から「反現象学」への転向であろう。第一巻の出版から遥か後の一九一一年に、「心理現象の分類について」という表題で『経験的立場による心理学』（第二巻）は最初に公刊されたが、この第二巻の付録論文には志向性理論を大きく逸脱する別種の理論が現れていることを、我々は容易に確認できる。[四] そこには晩年のブレンターノの思想的境地を示す（口述筆記論文も含む）幾つかの論文が収められているが、死後『非実在的なものからの転向』として編集・出版された遺稿や書簡の内にも ――比較的早い時期のものもあるが―― 前記の付録論文とほぼ同一の思考の軌跡を示しているものがある。この付録論文および『非実在的なものからの転向』に収められている書簡や小論などの、ポスト志向性理論として括ることができる幾つかの文献を利用することにより、前期の志向性理論とは相容れない（ように見える）後期理

論の一端を本小論では浮き彫りにしてみたい。これらのブレンターノの後期論文は、一定の一貫性はあっても、残念なことに本格的な体系性を欠いているゆえ、我々は何よりも、これらの不完全な諸論文に投影されている後期ブレンターノの思考の認識論的‐存在論的な輪郭にまずは注目すべきであろう。

フッサール現象学において、ブレンターノの萌芽的な志向性理論が徹底して観念論的に解釈されたことから分かるように、志向性理論とは元来――少なくとも潜在的には――存在者を意識の内なるものとして見なす観念論的傾向を有している。こうした志向性理論の成果としては多々あろうが、①『論理学研究』などで論じられているように、個体的事物ではない「普遍（本質）」や「範疇的対象性（「ある」「一つの」「全ての」「そして」などといった、名辞的意味に対応しえない非自立的な契機）」などの理念的対象性の哲学的重要性を指摘して、論理学を認識論的に基礎付けようとしたこと、② 物理的実在に対応せず因果的に作用もしえない虚構や想像や価値などが主要な哲学的テーマとして取り上げられる可能性を切り開き、意志や感情など非認識的な意識作用の解明のための哲学的基礎を提供しえたということ、③ 実存哲学に継承発展されるように、自然科学によって理想化される以前に直観され体験される身近な世界、すなわち我々が日常生きているがままの「意味」としての環境世界に回帰する必要性を説いたこと等々、が挙げられよう。[注]もちろん、志向性の立場を採りつつも超越論的エポケーという方法を採らない前期ブレンターノは、志向的なものを越えた外界や身体の実在を素朴に（自然的に）信憑しており、この限りにおいて、彼の哲学には依然として実在論的側面も疑いなく存していた。要するに、前期ブレンターノ哲学はこのような実在論と観念論の両面的‐中間的性格を有するが、これに対し、後期の根本的立場とは、①認識論的には直接実在論ないしは素朴実在論であり、②その基盤にある存在論はアリストテレス等の流れを継ぐ個体主義である、と言えるように思われる。ただ、後期ブレンターノはアリストテレスの存在論＝形而上学の影響は色濃く反映しつつも、ファンタスマなどの心的存在や固有の内的な認知プロセスを認めるその経験主義的認識論は――志向性という思想の淵源もアリストテレスである――

逆に拒否している。[六]

三　直接実在論的認識論と志向性理論の背理について

志向的対象とは心理現象の内に含まれているものであるから、外的実在そのものではありえず、またそれとの対応関係も保証されないゆえ、「非実在的 nichtreal ＝ irreal」なものと特徴付けられるものである。[七] 志向性の内に対象として現れているものは、外的世界の内に実在する事物であれ、ユニコーンのような想像上の事物であれ、志向性の様式には差異があるものの、その「客観性」の程度に何ら差異はない。しかしながら、『経験的立場による心理学』(第二巻)の「序」では、「最も重要な改訂の内の一つは、心理的関係はつねに実在的なもの Reales 以外のものを客観とすることができるという見解を私はもはや持っていないということである」と述べられている。[八] さらにこの書の付録論文では、後期ブレンターノの実在論的立場が明瞭に示されているのだが、それを表す命題を一九一五年の「思考の対象について」から取り出してみよう。

「我々の全ての思考の働きは、実在的なもの Reales を客観としている。また、思考する者自身はその思考客観に属している。そしてまた、思考する者は実在的なものである。ただ、我々が思考しつつ事物 Ding に関わる仕方は多様である。[九]」

「思考する者は誰であれ、語の全く同一の意味において、実在的なものを対象とするのでなくてはならない。[一〇]」

この引用中の「実在的なもの」とは、「個体的なもの」という含意もあるが、本小論では「実在的」という概念は、「非実在的」かつ「内在的」なものとしての「志向的なもの」と対立するものという含意があることにまず注目したい。例えば「我々は思考しつつ事物に関わる beziehen」という表現は、理論づけは依然不完全なものではあるとはいえ、明らかに直接実在論ないしは素朴実在論と呼ばれる形

態の認識論の本質を表現している。[一一]「志向性（志向的客観）」、あるいは近代哲学において往々にして持ち出されてきた「観念」「表象」などを介在させず、心の働きは直接に実在そのものと関わることができるということがここで表明されている。思考する者の内にあるとされる「志向的‐内在的客観」――実在的事物ではなく表象され思考されてあるだけの存在――を我々は思考し表象しているのではない。あるいは、それらを媒介にして外的事物を表象し思考しているのでもない。そうではなく、我々は実在それ自体を直に表象し思考しうるとここでは考えられているのである。次に一九一五年の「思考の対象について」という晩年の口述論文からの引用を見てみよう。

「我々が思考しつつまた愛しつつある何かあるものに関わっているので、そのあるものが我々の精神 Geist ないしは心 Herz の中に存在している、と言われるとしても、このとき問題となっているのは全く非本来的 uneigentlich な意味での存在である。それゆえ、思考されたものとして思考されたもの Gedachtes als Gedachtes、愛されたものとして愛されたもの Geliebtes als Geliebtes は、もちろんいかなる事物 Ding でもない。しかしまた、それらは我々の思考のいかなる対象でもない。そうではなく、思考する者 der Denkende および愛する者 der Liebende そのものは、実在的なものに属するのであり、この場合、対象と名づけられうるのである。[一一]」

言わんとしていることは前の引用文とほぼ同一であるが、ここでは新たな概念を駆使してより詳細に語られている。他の概念を補足しながらここで語られていることを説明してみよう。「思考する者」や「愛する者」自身は、「根源的 ursprünglich」な意味において、つまり「本来的 eigentlich」な意味において存在している「実在的なもの ens reale = Reales」であるが、他方、「思考されたもの ens rationis = Gedachtes」「愛されたもの」としての志向的客観のようなものは非本来的な意味の存在なのである。後者はは引用文でより厳密に、「思考されたものとして思考されたもの」「愛されたものとして愛されたもの」と表現されているが、こ

れは「事物」として実在しないものであり、本来的な意味では「存在する」とすら言えない疑似的存在者なのである。[一三] ここで登場している「思考されたもの」の定義については、一九一七年の「思考されたものについての学説」の中に次のような件が見出される。

「中世においては、思考されたもの ens rationis ということによって、本来的意味においてではなく、存在している es sei, es bestehe, es existiere、と言われるところのものが、理解されていた。これに対し、実在的に存立しているものについては、本来的な意味において、それは事物である、それは現実に存在している、それは本来的意味において存在している、と言うことができる。[一四]」

中世形而上学の実在論が説く存在者の階層構造の中では――当然のことでもあろうが――「思考されたもの」に付与される存在論的地位は決して高くはなかったであろう。例えば「金の山」が存在しているとしてもそれは「思考する者」の中にあるに過ぎないのであり、それゆえ「金の山が存在する」という陳述は、「思考された金の山が存在する」という非本来的な存在主張か、もしくは――何か真に存在する実在物についての本来的な主張と解されるべきなのだとしたら――「金の山が存在すると思考する者が存在する」ということ以上のことをどうしても意味しようがないのである。ブレンターノによれば、「思考されたもの（志向的客観のようなもの）が存在する」という命題は、根源的には「何かあるものを思考する者 ein etwas Denkendes が存在する」という文以上のことを意味しえず、後者の「存在する es gibt」という語のみが、根源的意味で使用されているのである。[一五] 「思考する者」や「愛する者」自身は本来的な存在としての実在物であるのだが、思考や愛の働きがその「内容/対象」とするものも本来は、志向的 - 内在的なものではなく、実在そのものでなくてはならない。このことは一九〇七 - 八年の論文でも端的に『思考された赤いもの gedachtes Rotes』ではなく、『赤いもの Rotes』が客観となる」と明言されている。[一六]

ところで、いかにしてブレンターノは、「志向的 - 内在

的客観＝思考されたもの」を積極的に認める初期の志向性のテーゼと矛盾しているように思われる、こうした考え方をするに至ったのか？ その動因の全体を見極めるのは至難であろうが、我々が今回取り上げる論文群の中では、以下の論述の中に、決定的な仕方で最も明晰に表現されている。(一七)

「思考する者は何かあるものを思考する、と言うことができるのみならず、思考する者は何かあるものをあるものとして思考する、と言うことができる。例えば、人間を人間として、あるいはまた、不確定な仕方ではあるが、人間を生物として、思考するのである。二つ目の「あるもの」も付け加えたわけであるが、これは、常に付け加えなくてはならないものでもある。また、この二つ目の「あるもの」は、思考する者の名前が一義的に定まっているならば、明らかに一義的に定まっていなければならない。しかし、この二つ目の「あるもの」が『思考されたもの』という意味で理解されてはならないということ、このこと以上に明白なことは何もない。ある一つの石を思考する者は、その石を「思考された石」として思考するのではない。そうではなくて、「石」として思考するのである。もしそれを「思考された石」として思考するのであれば、それを承認するときでも、「思考されたもの」としてのみ承認するということになってしまうであろう。(一八)」〔引用中の傍点は筆者による。以下同様。〕

心理現象は「実在性」を含まないものを客観とするという志向性理論の根本テーゼと、我々の思考は実在的な事物（例えば一個の「石」そのもの）を客観として有するという実在論的テーゼとは――少なくとも部分的には――矛盾している。だが前期志向性理論と同じく、後期の実在論でも、対象として存在するものと思考者との間にはある種の関係性が存立していると見なされているのであり、ただ後期実在論ではこうした対象を、もっぱら思考する者の内でのみ存在しうる志向的客観と捉えるのは誤りであり、否定されねばならないと考えられているのである。ここでブレンタ

ーノの言わんとするところを敷衍してみよう。今ここで、我々の思考が実在的なものとしての「石」に直接関係できないと仮定してみよう。つまり仮に、思考の働きが関わるところの一つの「石」が実在する個体としての「石」そのものでなく、「志向的‐内在的客観としての（志向的に内在する）石」であるとしよう。これは当然「思考された石」と表現してよいが、もしそうだとすると、「石を石として思考する」ということは、「一個の石を『思考された石』として思考する」ということになる。ここでは、「思考」が同一の対象としての「石」に二重に関係していることになるが、これは我々の思考の実相に反している。「思考されたものを思考する」というかたちで思考の働きが同一の対象に二重に関わっている場面など我々はどこにも目撃しえないのであり、それゆえ、思考することとはいわば「いまだ思考されていなかった実在を思考にもたらす」というだけのことなのであろう。したがって、物そのものの世界以外に志向的客観の世界を認める前期の二世界説は、余剰物を設けたにすぎないのであり、思考するときあくまで我々は唯一の石そのものを直接思考しているのでなければならない、とブレンターノは考えているのである。

四　直接実在論的認識論の基底にある個体主義的存在論

これまでの論述からも推測しうるであろうが、こうした素朴実在論的認識論をブレンターノが採ることの背景には――「思考する者」も「その思考のはたらきの内容となるもの」も共に個体として本来的な意味において実在すると考える――個体主義的存在論というべき前提が存しているものと思われる。[一九] 一九〇八年の小論では「やはり実在的なものは個体的に規定されたものでなくてはならない」と述べられている箇所もあるが、「実在性」と「個体性」は重複するところが大きい類縁関係にある概念なのである。[二〇] 『非実在的なものからの転向』に収録された「客観について」（一九〇六年）という比較的早い時期の論文では既に、次のように明晰に述べられている。

「内容とは、関係項 Korrelat、つまり思考されたものとして思考されたもの Gedachtes als Gedachtes ではない。ある者が『Aは存在する』と思考するとするなら、存在するAは、その内容であるが、思考された存在するAは、その内容なのではない。存在するAは、Aは存在すると思考する者がいなくても、存在しうるであろう。全ての思考する者が対象つまり内容を有するといっても、そのことによっては、その者が、関係するもの Korrelativ に向かい合っている相対的なもの Relativ だということは、意味されていない。[一一]」

「Aを思考する者が存在すると言う人と、思考されたAが存在すると言う人は、まったく同一のことを述べている。そして、後者は前者と同じだけのことしか述べていないのだが、それはAそのものが存在するということである。[一一一]」

志向性理論の観念論的テーゼが拒否されているのは明白であるが、「思考内容」は思考する者から独立に（本来的 - 根源的な意味で）存在しているものであるということも――証明されてはいないとしても―― 明らかにここで主張されている。思考する者自身が ――個体として――実在すると考えられていることに加えて、「思考の内容」の方も「単に思考されただけのもの（思考されたものとして思考されたもの）」と見なされて志向的かつ内在的に解釈されずに、あくまで実在論的に理解されている。[一一二] 具体的に言えば、「赤いものを思考する者は赤いものなくしても存在しうるし、逆もまた成り立つ」ということである。[一一四] ここで前提されている思想は、思考する者ばかりかその思考内容も真正なる意味の存在者としての個体的実在であるという存在論なのであり、こうした個体主義的存在論の制約下において、ブレンターノは、思考者がその対象に関わるとき思考者の個体的実在性ばかりかその思考内容の個体的実在性も共に保たれている、換言すれば、思考者はあるものを思考することによってこの対象の客観的実在性を失うことなくそれに関係することができるという実在論的認識論を呈示しているのである。[一一五]

とはいえ、ブレンターノの実在論の理論的基礎づけは

依然不完全であり、実在認識のプロセスの説明は決して充分なものではない。それでも例えば、一九〇七‐八年の小論「思考と思考されたものについて」では、アンセルムスやロッツェの実在論について言及しているところが若干参考になるかもしれない。事物が「現実の中での存在」でありつつ、同時にその客観性を失わずに「思考の中での存在」でもありえるというように、二重の仕方で存在しうるのであれば、それは思考されることにより非事物化‐観念化される――志向的対象として意識内在化され、主観的表象内容へと変質する――と見なす必要はないと考えられる。この点、ロッツェの「現実の中での存在 Existenz と同じく、悟性の中での存在も、真に事物の存在 Existenz なのであり、ただ異なったあり方をしているだけである」という実在論的議論は示唆するものがあると思われる。(一六)

また「客観について」(一九〇六年)という論文でも、「客観を有するということは全ての心理現象の一般的性格である」という、志向性のテーゼに類した表現が見られる。(一七) だが、ここでの「客観」は、「思考されたものとして思考されたもの＝非実在的なもの(志向的‐内在的なもの)」として観念論的に理解されるべきではなく、「(思考されてはいるが)実在的なもの」と解されるべきであろう。志向性(非実在性)の立場から対象の実在性を認める立場への転向において、「客観への関係」理論は廃棄されたというよりも、実在論的に再解釈されたと言うのが正確であろう。だが実は、あるかたちの実在論的見方は前期の志向性の立場においても、確実に背景に息づいていた。すなわち、ブレンターノは、志向的客観を認めることを公言しつつも、実在世界をその理論から排除していない、つまり超越論的エポケーのようなものを遂行していないため、結局は、個体的事物からなる外的世界と志向性の内的世界を認める二重世界論が、前期ブレンターノの立場なのであったのだが、その存在論的信念が浮上してくるに伴い、志向性というもの全般を放棄し直接実在論的認識論を要請することになる。『経験的立場による心理学』では志向性理論の陰に隠れていたときから伏在していた個体主義的存在論が後期ブレンターノでは顕在化し、その枠の中でブレンターノは(外的実在を否定する観念論に通じかねない)志向性理論を拒否し素朴実在論の立場を表立って採ったと言えよう。(一八)

五　フッサール現象学の「超越論的」意義について

さて、こうしたブレンターノの実在論について、超越論的観念論の側からはどういった反論が可能か考えてみたい。先に見たように、思考の対象が前もって思考されたもの、すなわち「思考されたものとして思考されたもの」だとすると、思考が同一の対象に二重に関係することになるという先の論点については、フッサール現象学の立場からも種々の反論が可能である。フッサールが行ったように自然的態度と超越論的態度を画然と次元的に区別し――しかも後者は前者のメタレベルにあるものとして前者を包括する――後者の態度の中で使用される認識論上の言語そのものをそこで新たに定義し直すなら、「思考する Denken」という作用を二度持ち出す必要はなくなるであろう。このようにすれば、「思考する」という自然的な認識論の語は超越論的な概念に置き換えられる。もちろん「思考」という概念そのものが超越論的な論脈で使用されないということではないが、厳密には、「構成/ノエシス-ノエマ/意味」などのお馴染みの超越論的諸概念に吸収され再構築されることとなる。

自然的態度においては、我々は多かれ少なかれ直接（素朴）実在論的であり、外的事物を、例えば「石」なり「馬」なりを直接知覚し認識していると信じ込んでいるであろう。[二九]（もちろん自然的態度とは非超越論的な態度全般を指す極めて広範な概念であるので、それは必ずしも実在論的見方のみを意味するのではない。）これに反し、志向的なものを採り入れた見方は何らかの程度において観念論的であるか、ともすればそれへと成長する種子を常に内在させている。この種子の中には、ブレンターノの指摘したように――直接実在論のごとく「石を石としてそのまま思考する」ではなく――「石を『思考された石』として思考する」という可能性が胚胎しているのだが、こうなると志向性理論は、フッサールが――そしてまた後期ブレンターノも――忌避した悪しき「主観的観念論」に堕してしまうことになるであろう。[三〇]だが、自然的な認識論の言語で「石を思考する」と記述される事態は、超越論的態度において、「石」が意味（ノエマ）としてノエシスの作用により構成される云々、

という周知の語り方で記述され直すわけである。

このときフッサールの構成理論がブレンターノの志向性理論と異なる点は、意味（ノエマ）として解釈された「石」は、心の中に内在するものとしてその①主観性・内在性・観念性が強調されるのではなく、超越論的エポケーの方法によって実在世界（実在的事物そのもの）が遮断されることと相まって、その②超越性・客観性・現実性（指示性・方向性）等々にむしろ光が当てられることになるということである。[二〇] その成否はともかく、超越論的観念論とはこの限りにおいてまさに、主観的観念論でも素朴実在論でもない第三の新たな地平に立とうとする特異な目論みであったと言えるのである。こうしたフッサールの説について、ここで深入りすることは避けるが、いずれにせよこのような観点からすれば、超越論的観念論とは、実在論の単なる否定としての観念論ではなく、我々が自然に抱く実在論的な信念をより高次の視点から解体し新たな概念を駆使して再解釈する試みであった、と言えるであろう。現象学という学の目指すこうしたメタ性は、事実、他ならぬ超越論的エポケーという方法が――すなわち世界の存在を肯定も否定もせずそれを括弧に入れるというあの操作の――目指すところであり、また誰よりもフッサール自らが自認していた己の学説の真髄でもあった。

六　結語
――ブレンターノの実在論の課題

ところで、これまで論じてきたような直接実在論の立場を採ったとしても、別の課題が新たに生ずるであろう。例えば、志向性理論においては、普遍や虚構・想像なども、実在物と同様の積極的な価値を保持することが可能であったが、直接実在論的立場を採るとなれば、そうした対象はどのように扱われるのかが問題となろう。ブレンターノに従って、個体としての馬が精神の外に実在すると前提し、かつまた、個体としての馬を我々は直接に表象し思考することができると仮定しよう。しかし仮にそうだとしても、つまり半人半馬の怪物や普遍などを個々の馬のごとく思考することが可能であるとしても、そのことからは、それら

が精神の外に存在する真正なる実在物であるということは直ちに帰結しえない。もし仮に帰結するとすれば、今度は個体的実在でないものの現実存在とは一体いかなるものかという、それらの存在の様式が問題となろう。本論では詳しく論じる余裕はないのだが、そうだとするなら、個体的実在物と同じく我々の思考の対象になっている（少なくともそのように思われる）にも拘らず、根源的な意味では存在しない普遍や虚構などの非実在物をいかに扱うかが、ブレンターノにおいて問われなければならないし、また実際、問われているところもある。さらには、周知のように、錯覚や外的実在のあり方に対応しえない第二性質の問題など、直接実在論には多くの認識論上の困難が生じる。

本来的意味では存在しないもの、すなわち「抽象物 Abstruktum」――この対立概念が「具体物 Konkretum」である――とブレンターノが見なすものには、普遍や虚構物以外に多々あるが、それは次の件に簡潔にまとめられている。

「それゆえ、実在的なものという概念に完全に含まれる事物以外のものは、決して心理的関係にとって客観でありえないということ、このことが一般に妥当する。現在・過去・未来、あるいはまた、現在するもの・過去のもの・未来のもの、また、存在・非存在、あるいはまた、存在するもの・存在しないもの、必然性・非必然性、可能性・不可能性、あるいはまた、必然的なもの・非必然的なもの、可能なもの・不可能なもの、真・偽、あるいは、真なるもの・偽なるもの、善・悪、いわゆる現実性（エネルゲイア・エンテレケイア）、あるいは、形相（エイドス・ロゴス・モルフェー）。これらのものについては、アリストテレスが語っており、それらが言語で表現される際には、赤さ・形・人間本性などのような抽象名が用いられるのが常である。こうしたものに加え、承認されたもの・拒否されたもの・愛されたもの・憎まれたもの・表象されたものといった、客観としての客観も、実在的なものと同じようには、我々が対象として心理的に関係してゆくものでは決してありえない。[111]」

ここに挙げられているような根源的な意味の存在でない抽象物のうちの幾つかについては、晩年の論文において、例を挙げて論じられているところもある。ブレンターノによると、例えば、過去や未来は現在存在するものを承認する際の様式であるに過ぎず、現在あるもののみが真に実在的なものである。したがって、カントやニュートンが構想したような抽象的な形式 ――主観的なものであれ客観的なものであれ―― としての時間‐空間などは本来的な意味の存在ではないとされる。ブレンターノは個々の事物の持続としての時間や、諸個体の位置する空間点およびそれらの連続的関係は認めるが、実無限の連続体としての空虚な時間と空間は認めていない。(二二) これについては例えば、最晩年の一九一七年の「思考されたものについて」で、「個々のバラ、個々の馬が存在するのみである。そういうわけでまた、個々の空間的に延長したもの、個々の持続するもののみが存在する」と明快に述べられている。(二四) ここでのブレンターノの次なる課題は、疑似存在たる空間や時間などの抽象物がいかにして存在しているかのように我々に見えるのかの仕組みを解き明かすということであろうし、その解明を他の抽象物についても施すことであろう。

換言すれば、根源的な意味においては個体的実在のみが思考されうるのだとブレンターノが主張し、思考内容のうち個体的実在でないものを悉く個体的実在に「還元」するのならば、非実在が実在するものとして我々に「妥当」しているからくりを説明すること ――これはまさにフッサール現象学の「構成分析」にも類似した手続きであろう―― が同時に求められるのである。だがそれに加えて、何よりそうした個体的実在物を我々が知覚し認識する際のプロセスをより詳細に分析し明らかにしなくてはならないであろう。これは（個体主義的存在論という前提のもとで）直接実在論を批判に耐えうるより真っ当な認識論へと練り上げてゆくことでもある。これらの問題はブレンターノのテクスト広く精査して再考されるべきであるが、残念ながら本小論にその余裕はなく、筆者の今後の課題として別稿に譲りたい。(二五)

註

（一）筆者が使用した『経験的立場による心理学』の版は、オスカー・クラウなどにより編集され、遺稿などが付録として付けられている以下のものである。

Franz Brentano, *Psychologie vom empirischen Standpunkt*, mit Einleitung, Anerkennung und Register herausgegeben von Oskar Kraus, Erster Band. Philosophische Bibliothek Band 192, unveränderter Nachdruck 1973 der Ausgabe von 1924, Felix Meiner Verlag, Hamburg.

——, *Psychologie vom empirischen Standpunkt*, mit Einleitung, Anerkennung und Register herausgegeben von Oskar Kraus, Zweiter Band: Von der Klassifikation der psychischen Phänomene, mit neuen Abhandlungen aus dem Nachlass. Philosophische Bibliothek Band 193, unveränderter Nachdruck der Ausgabe von 1925, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1959.

——, *Psychologie vom empirischen Standpunkt*, Dritter Band: Vom sinnlichen und noetischen Bewusstsein — Äussere und innere Wahrnehmung, Begriffe, mit Anerkennung herausgegeben von Osker Kraus, neu eingeleitet und revidiert von Franziska Mayer-Hillebrand. Philosophische Bibliothek Band 207, zweite Auflage 1968, unveränderter Nachdruck 1974, die erste Auflage erschien 1928 unter dem Titel „Vom sinnlichen und noetischen Bewusstsein", Verlag von Felix Meiner, Hamburg. これらの著作は、Psychologie と略記し、その参照箇所については、ローマ数字で巻数を、アラビア数字で頁数を表す。

また、書簡 - 小論集『非実在的なものからの転向』は次の版に拠った。Franz Brentano, *Die Abkehr vom Nichtrealen*, Briefe und Abhandlungen aus dem Nachlass, mit einer Einleitung herausgegeben von Franziska Mayer-Hillebrand. Philosophische Bibliothek Band 314, 1966, die erste Auflage erschienen im A. Francke Verlag, Bern, 1977, Titelauflage in die Philosophische Bibliothek als Band 314, Felix Meiner Verlag. この書は本論では、Abkehr と略記し、アラビア数字で頁数を指示している。

（二）我々は例えば音を聞くとき、「音」という表象と「音を聞く作用」の表象という二つの表象を有するが、後者の心理現象は内的知覚により、前者の物理現象は外的知覚により把握されている。音を聞く作用を客観とする作用をさらにまた客観とする、それとは別の心理作用、というような「第三のもの」をここで認めると無限背進に陥るが、ブレンターノはこれを認めない。音という第一次的客観には第一次的な心理作用が向かうが、この第一次的心理作用そのものは、第二次的客観として、第二次的な心理作用によって、ともに把握されていることは確かである。しかし、後者の第二次的心理作用は、前者の第一次的心理作用と別ものではなく、それと合致しているため、遡行はこの第二段階で停止する、と考えられている。（Psychologie Bd.I, S.183.）これについて第一巻で、「ある心理活動についての内的知覚は、この心理活動とともに同一の実在的統一 reale Einheit に属している」と端的に述べられている。（Psychologie Bd.I, S.249.）反省のもつこうした統一構造によって内的知覚の明証性は保証されていると考えられる。

（三）Vgl. Psychologie Bd.II, S.121. ブレンターノによる心理現象の分類の特徴は、①「表象」が他の二者を基づけると考えられている点、②テーテンス以来区分されていた「感情」と「意志」が明確に一線を引いて区別しえないものとしてひとまとめにされている点、③「認識」や「思考」としてひと括りにされることが多い「表象」と「判断」を区別したことなどがある。フッサールは『論理学研究』第五研究で「表象」概念の有害な多義性を指摘し、「表象」の一三の異なる意味を分類している。彼によれば、この多義性が近代の認識論を混乱させてきた原因の一つであるが、このため彼自身この概念

を避けることも多い。

（四）ブレンターノは最晩年には失明状態にあったため、『経験的立場による心理学』（第二巻）の付録論文など、幾つかの論文は口述筆記によるものである。Vgl. Oskar Kraus, *Franz Brentano: Zur Kenntnis seines Lebens und seiner Lehre*, C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung, München, 1919.

（五）Vgl. *Husserliana: Edmund Husserl Gesammelte Werke* Bd.XVIII, XIX/1, XIX/2. 範疇的直観は感性的直観とは異なるが、やはり一種の直観なのであり、しかもこの特殊な直観は感性的知覚のような基礎的作用に基づけられている。志向的対象性にはAやBという個体的な事物だけではなく、「AとB」や「AはBである」などという比較的高次の対象性もあるが、我々はAやBを感性的に知覚するだけでなく、「AとB　(A und B)」「AはBである　(A ist B)」という対象も独特の意味での直観によって充実されうるとフッサールは考えている。フッサールの志向性理論とは単なる原子論ではないわけである。

（六）Cf. Rolf George, Brentano's Relation to Aristotle, in *Die Philosophie Franz Brentanos*: Beiträge zur Brentano-Konferenz, Graz, 4.-8. September 1977, herausgegeben von R. M. Chisolm und R. Haller, Edition Rodopi N.V., Amsterdam, 1978,（auch erschienen als Grazer Philosophische Studien Band 5, 1978）.

（七）「非実在的」という語の原語として、フッサールは „irreal" という語を使用するが、ブレンターノは „nichtreal" という語を多用する。

（八）Psychologie Bd.II, S.2.

（九）Psychologie Bd.II, S.216.

（一〇）Psychologie Bd.II, S.214.

（一一）初期ブレンターノの志向性理論の到達点たる『経験的立場による心理学』（第一巻）には志向性の本質について簡潔な説明を施したあまりにも有名な件があったが、後の『非実在的なものからの転向』において、志向性理論の内の対象所有性の要件は実のところ廃棄されずに、次のようにも言い換えられる。「思考する者は何かを思考する、つまり思考する者は無内容でも、無対象でもない。このことは否定しえない。」(Abkehr, S.323.) ここでの「内容」は「存在する内容」として実在論的に解釈されるべきであって、「思考された存在する内容」として観念論的に解釈するべきではなかろう。なお、ここで「思考」と言われているが、なにも高度な理論的判断や推論などをまず念頭に置く必要はない。思考することは見ることや聞くことに似たものだと言われているところもある。それゆえ、ブレンターノでは科学的思考以前の「素朴 naiv」な日常的思考が直に実在に関係しうると考えられていると解してよかろう。(Vgl. a.a.O.)

（一二）Psychologie Bd.II, 215f.

（一三）ブレンターノは、„ens rationis" と „ein Gedachtes" を多くの箇所で等置しており、したがって前者も「思考されたもの」と訳すのが適当であろう。また、志向的対象のようなものがあらゆる思考の作用が関わる内容なのだとすると、そこに成り立っている関係は、（実在論的見地からすれば）正当に「関係」と呼べるようなものではないこととなり、それゆえ「あらゆる思考作用（コギトの働き）に特徴的ないわゆる心理的関係は本来の関係ではない」ことになるであろう。(Abkehr, S.372.)

（一四）Abkehr, S.390.

（一五）Vgl. Abkehr, S.361, 390.

（一六）Abkehr, S.369.

（一七）志向性理論からの離反の要因を見定めるために、アリストテレス研究を含めたブレンターノの他の論文を幅広く研究することが今後の筆者に要求される。

（一八）Psychologie Bd.II, S.213.

（一九）『経験的立場からの心理学』の第二巻（一九一一年）の本文でしばしば論じられていることであるが、ブレンターノは、あらゆる形式の判断（定言的形式・仮言的形式・選言的形式）は、意味を変えずに、存在命題のかたちで表しうると考えている。定言的判断についてのみ説明すれば、「pはqである」という定言命題は、「qであるpがある」という存在命題に変換しうる。そして、「pがある」という判断は、「p」という表象と「存在（ある）」という表象との単なる結合ではなく、「p」という対象を真なるものとして肯定し、その存在を承認したものである。他方、「pはない」という判断は、「p」というものの存在を真ならざるものとして拒否することである。こうしたブレンターノの判断論の根底には、個体主義的存在論が存しているものと思われる。(Psychologie Bd.II, S.44-50, 55-60, 82, 193.)

（二〇）Abkehr, S.351.

（二一）Abkehr, S.323f.

（二二）Abkehr, S.339.

（二三）一九一七年の論文によると、思考の「対象 Gegenstand」より「内容 Inhalt」の方がより広い要素を含有していると考えられている。「思考の内容」には、「思考されたもの」つまり「作用が関係する対象」以外に、それが思考される「様式 Weise」も含まれる。直接に in recto に思考されているか、それとも間接に in obliquo 思考されているか、判断において承認されているか、それとも否認されているか、心情活動において愛されているか、それとも憎まれているか等々の、極めて多くの要件がそこには含まれている。「内容」とは何かということは、現象学でも重要な問題であり、『イデーン』（第一巻）の後半部は、純粋意識の「内容」としての「ノエシス - ノエマ」に関する論述に充てられ、『論理学研究』「第五研究」は「志向的体験とその『内容』」と題されている。フッサールにおいてもブレンターノと同様、「対象」より「内容」の方が多くの要素を含有するとされている。(Vgl. Abkehr, S.394; *Husserliana: Edmund Hussert Gesammelte Werke* Bd.XIX/1, V Über intentionale Erlebnisse und ihre „Inhalte“) Abkehr, S.369.

（二四）ここでは、「赤いもの」と「赤いものを思考する者」という二つの実在する個体の関係が問題となっていると考えられる。

（二五）クルトツィムスキーの包括的で周到なブレンターノ研究によれば、「実在的なもの Realia」は、大きく分けて、「実体 Substanzen」と「固有性 Eigenschaften」に区分される。実体はまた、「単純なもの」と「合成されたもの」に分けられる。後者はさらに、「連続体 Kontinua」と「集合体 Kollektive」からなり、前者には「精神 Geister」と「物体 Körper」が含まれる。(Vgl. Arkadiusz Chrudzimski, *Die Ontologie Franz Brentanos*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht/Boston/London, Phaenomenologica 172, 2004, S.182.)

（二六）Abkehr, S.372.

（二七）Abkehr, S.339.

（二八）最初期ブレンターノの論考である学位論文「アリストテレスにおける存在者の多様な意味について」では、アリストテレスのカテゴリーについて論じられており、一八六二年テュービンゲン大学に提出された。

（二九）筆者の現在の研究段階で断言するのは早計であるが、ブレンターノの実在論とは、フッサール現象学の概念で言えば、こうした素朴な「自然的」存在信念への帰還だったのではないか、と思われる。

（三〇）Vgl. *Husserliana: Edmund Husserl Gesammelte Werke* Bd.III, §55.

（三一）志向性という概念は「関係」概念である以上、そこには①

と②の一見矛盾するかに見える契機が、ともに含まれていなくてはならない。（完全に厳密な意味で意識の外部にあるものに関係することはできないが、関係するものと関係付けられるものは何らかの意味で異なっていなくてはならない。）ブレンターノの心理学は実在世界自体がエポケーにより遮断されていないため、いまだ①の契機に重心が置かれているが、志向性を実在的なものから極限まで純化したフッサールにおいては、志向的対象（＝意味）のシステムとしての世界こそ真に「現実的 wirklich」な世界とされるため、②の要件が重視される。

（三二）Psychologie Bd.II, S. 162.

（三三）Vgl. Psychologie Bd.II, S.272f, 374; Abkehr, S.356 u.s.w.

（三四）Psychologie Bd.II, S.263.

（三五）本論では論じなかったが、前期ブレンターノについては、例えば次の書を参照。Arkadiusz Chrudzimski, *Intentionalitätstheorie beim frühen Brentano*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht/Boston/London, Phaenomenologica 159, 2001. この書および前掲の書は、ブレンターノ研究史の中で恐らく最大の広がりを備えた成果の一つであろう。前掲の著作の中には、前期の「概念論 Konzeptualismus」から後期「物主義」への変遷なども、図表によって整理して解説されている。（Vgl. Arkadiusz Chrudzimski, *Die Ontologie Franz Brentanos*, S.191, 201 u.s.w.）

Der Weg der Antiphänomenologie
—— Über die nichttranszendentale Phänomenologie und die auf die individualistische Ontologie gegründete direkt-realistische Erkenntnistheorie bei Franz Brentano ——

Norikazu TSUGITA

Die empirische (deskriptive) Psychologie des frühen Franz Brentanos in *Psychologie vom empirischen Standpunkt* Band I & II kann als eine Art von Phänomenologie bezeichnet werden, da eine Intentionalitätstheorie in den Werken enthalten ist. Aber wegen des Fehlens der transzendentalen Epoche kann seine Wissenschaft nicht als die reine und transzendentale Phänomenologie bezeichnet werden, wenn man sie auch eine Psychologie oder eine nichtranszendentale Phänomenologie nennen darf.

Während Edmund Husserl seine Intentionalitätstheorie vertiefte und den transzendentalen Idealismus formte, kehrte sich Brentano von dem von ihm bezogenen Standpunkt der Intentionalität ab und verwirklichte eine Art von Realismus (den direkten Realismus), die er im Anhang und Nachlass in *Psychologie vom empirischen Standpunkt* Band II und in den Aufsätzen in *Die Abkehr vom Nichtrealen* entwickelte. Oft wird dieser Standpunkt des späten Brentanos kurz „Reismus“ genannt.

Nach Brentano kann unser Denken sich auf etwas Reales ohne das Intentionale ganz direkt beziehen. Wir haben Reales zum Objekte des Denkens. Ein deutlicher Beweis für diese Denkweise findet sich in seinem Spätwerk. Wenn man ein Reales wahrnimmt und es nur als „ein Gedachtes“ betrachten kann, dann muss die zwei Denkakte sich auf ein und dasselbe beziehen. Doch diese Zweiheit ist ganz absurd. Daraus folgt, dass das intentionale Objekt überhaupt nicht als Seiendes im eigentlichen und ursprünglichen Sinne gesehen werden soll. Deshalb sagte Brentano in einem Aufsatz: „wer einen Stein denkt, denkt ihn nicht als gedachten Stein, sondern als Stein.“ (*Psychologie vom empirischen Standpunkt* II, S.213.)

Weiterhin soll darauf hinwiesen werden, dass sich diese direkt-realistische Erkenntnistheorie Brentanos in seiner individualistischen Ontologie begründet, welche wahrscheinlich aus der aristotelischen Metaphysik stammt. Es war eine wichtige ontologische Voraussetzung in der späten Philosophie Brentanos, dass nicht nur ein Denkendes ohne ein Gedachtes, sondern auch ein Gedachtes (dies bedeutet hier nicht intentionales Obkekt, sondern reales bzw. individuelles Seiendes) ohne ein Denkendes existieren kann. Die beiden Arten von Seienden sind voneinander abhängige Existierende d. i. Reale (Realien), also Seiende im eigentlichen und ursprünglichen Sinne.

Husserl seinerseits machte einen deutlichen Unterschied zwischen der transzendentalen und der natürlichen Einstellung, und versuchte damit eine neue Philosophie auf höherem Niveau zu entwickeln, nämlich seine transzendentale Phänomenologie. Diese neue Wissenschaft leugnete den Realismus nicht einfach,

sondern beabsichtigte ihn vielmehr anerkennend zu überwinden. Husserl hob die Wirklichkeit und Tranzendenz der intentionalen Gegenstände stärker als ihren Immanenz hervor. Die intentionalen Gegenstände und Sinne (die Noemata) können als die wahrhaft „wirkliche“ Objekte gesehen werden, weil die Dinge an sich selbst in einem metaphysichen Sinne als Folge der transzendentalen Epoche eingeklammert werden.

Im Gegensatz zu diesem idealistischen Denkprozess Husserls, trieb Brentano seine individualistische Ontologie und direkt-realistische Erkenntnistheorie voran. Von dieser Lehre des späten Brentanos schließen sich nicht nur die intentionalen Objekte (Anerkanntes, Geleugnetes, Geliebtes, Gehasstes, und Vorgestelltes u.s.w.), sondern selbstverständlich auch die Universalien selbst (Röte, Natur des Menschen u.s.w.) aus. Ausserdem werden Raum und Zeit wie Vergangenheit und Zukunft in dieser Lehre geleugnet, solange sie als Reales charakterisiert werden. All diese sind nicht Seiende im eigentlichen und ursprünglichen Sinne und werden „Abstrakta“ genannt. Unter der Voraussetzung der indivualistichen Ontonogie gehören zu den Konkreta bzw. Realien (genauer gesprochen, zu den einfachen Substanzen) Geister und Körper. Aber es bereitete dem späten Brentano grosse Schwierigkeiten, im Rahmen der oben ausgeführten typischen Ontologie den direkten Realismus widerspruchlos zu durchdenken und seine reistische Lehre zu vervollkommnen.